

## 石巻港の「みなと文化」

佐々木 淳

---

## 目 次

|   |       |
|---|-------|
| 第1章 石巻港の整備と利用の沿革                              | 10-1  |
| 1. 古代・中世                                      | 10-1  |
| 2. 近世   | 10-2  |
| 3. 明治・大正・昭和戦前期                                | 10-3  |
| 4. 昭和・平成期                                     | 10-3  |
| 第2章 「みなと文化」の要素別概要                             | 10-5  |
| 1. 船を用いた交易・交流活動によって運び伝えられ、育ってきた「みなと文化」        | 10-5  |
| (1) 芸能  | 10-5  |
| (2) 言語  | 10-5  |
| (3) 文芸  | 10-5  |
| (4) 信仰  | 10-5  |
| (5) 節句・行事                                     | 10-6  |
| (6) 生活用具                                      | 10-6  |
| 2. 交易による流通市場の形成によって育ってきた「みなと文化」               | 10-7  |
| (1) 物資の流通を担う産業                                | 10-7  |
| (2) 交易物資の保管施設                                 | 10-7  |
| (3) 行政施設                                      | 10-7  |
| 3. 航路ネットワークを利用した地場産業の発達によって育ってきた「みなと文化」       | 10-7  |
| (1) 港湾関連産業（海運や港湾活動を支える産業）                     | 10-7  |
| (2) 港湾利用産業（原料の搬入・製品の積み出し）                     | 10-8  |
| 4. 港を介して蓄積された経済力に基づき、<br>人々の生活の中で育ってきた「みなと文化」 | 10-8  |
| (1) 遊里・料亭文化                                   | 10-8  |
| (2) 芸術・芸能                                     | 10-8  |
| (3) 文芸  | 10-9  |
| 5. 港を中心とする社会的・経済的営みの総体として形成されてきた「みなと文化」       | 10-9  |
| (1) 港発祥の地                                     | 10-9  |
| (2) 港・海運に関する歴史的施設                             | 10-9  |
| (3) 港町の町並み                                    | 10-9  |
| (4) 港町の景色（みなとの文化的景観）                          | 10-10 |
| 第3章 「みなと文化」の振興に関する地域の動き                       | 10-11 |
| 1. 港湾感謝祭の実施                                   | 10-11 |
| 2. 海洋文化発展を目的とした慶長使節船ミュージアム                    | 10-11 |
| 〔参考文献〕  | 10-12 |

所在地：宮城県石巻市

港の種類：港湾

港格：重要港湾



【位置図】



【現況写真】(宮城県石巻港湾事務所)

## 第1章 石巻港の整備と利用の沿革

### 1. 古代・中世

牡鹿半島の付け根、北上川河口に位置する石巻は、古くから海と川の恵みにより人々が暮らしていた。縄文時代の貝塚が数多く残り、縄文人は豊富な魚介類を海と川から得ていたことがわかる。おそらく丸木船を用い、ある程度は海に出ての漁がおこなわれていたものと推定される。

古代に入ると、古墳時代初期の遺跡が多数存在している。そのなかでも注目されるのは、新金沼遺跡である。1995年から2000年にかけての発掘で、北方系の続縄文土器と東海系の土師器が出土した。このことは、石巻において、南北の交流があったと考えられ、人・ものの移動が海や川を使って行われた可能性が十分にあるのである。

日本書紀仁徳天皇五十五年の条に、「蝦夷」が叛いたので、「田道」を遣わして討たせたが、「田道」は敗れて、「伊寺水門」で死んだとあり、この「伊寺水門」が石巻であるという説があるが、これは、上毛野氏に伝わった説話であり、真偽は不明である。

奈良～平安初期にかけては、「牡鹿連」とそれに連なる「道嶋氏」が、陸奥国及び中央政界において活躍している。彼らは「蝦夷」系の氏族ではないと推定されており、海の道を通して直接石巻地方（牡鹿地方）に来たものと考えられている。

平泉藤原氏の時代になると、石巻市水沼の窯跡から渥美半島から来た職人が焼いたと考えられる陶器が出土している。このことは、この時点において、石巻が、北上川と太平洋沿岸航路を結ぶ港としての機能を備えたところとなったと考えられる。

鎌倉期には、石巻は、鎌倉御家人の葛西氏の所領となった。葛西氏の欧州における所領の大部分は平泉を中心とする地域であるのに対して、石巻を含む牡鹿郡は飛び地であり、それは、石巻が平泉の外港であったことの証左である。

そして、おそらくこの頃の石巻港は「牡鹿の湊」と呼ばれていたと推定される。

南北朝期には、暦応元年＝延元3年（1338）に伊勢から東国に向かった南朝方の船が途中暴風に遭った際に、行方不明になった船が「宇多敷牡鹿」に着いていないかという北畠

親房の書状が残っている。この場合の「牡鹿」が牡鹿湊を指していることは間違いないと考えられる。

このように古代から石巻は、人や物の交流の拠点であり、遅くとも平安末期までには港として機能するようになり、中世を通じて港としてある程度の繁栄はしていたものと考えられる。

## 2. 近世

前節で見たように石巻港は、古代から港として機能してきたと考えられるが、大きく発展したのは、近世に入ってからである。

豊臣秀吉による天下一統の最終段階で服属した伊達政宗は、天正 18 年（1590）の奥羽仕置及び翌年の奥羽再仕置により本領の多くを失い、代わりに旧葛西・大崎領を与えられた。この時点の旧葛西・大崎領は、一揆などで荒廃しており、それまでの本領に比べると、政宗の知行高は減り、その国替えは、政宗にとって外聞の悪いものであったという。

しかし、伊達政宗は、大坂の陣以後、本格的に領内開発を進めていった。そのなかでも大きかったものは、北上川の流路整備である。北上川の流路整備は、流域の荒地や湿地の新田開発、洪水の防止、河川舟運網の整備という一石三鳥の政策であった。

その結果、石巻港は北上川流域から米などが運ばれ、江戸へ積み出される仙台藩にとって最重要な港となった。仙台藩米は、本石米と呼ばれ、その出来不出来は江戸の米相場に大きな影響を与えたという。また、仙台藩以外にも一関・南部・八戸の各藩が北上川流域に領地があり、石巻港から江戸などへ米を積み出していた。

このように物資の積み出し港として栄えた石巻港であるが、仙台藩は城下繁栄の政策として、仙台六仲間と呼ばれる卸問屋の仲間に独占権を与えたため、石巻廻船は江戸からの帰り荷物を自由に積むことができなかった。また、基本的に石巻に集まった米穀は江戸での売り払いが原則であったため、石巻において市場は発達しなかった。港湾都市石巻の基本的な機能は物資の集散地としての倉庫機能であり、他の港湾都市のような在地の市場の発達は見なかったのである。この点が近世における石巻の港湾としての限界があったと考えられる。

近世の石巻港は、次の五つの村で構成されていた。(1)石巻村、(2)門脇村、(3)湊村、(4)石巻村端郷住吉、(5)蛇田村である。この五つの地区は「石巻浦向五箇村」と呼ばれ、共同で「徒者締役」を置くなど、「大津之所柄」を構成していた。

さて、近世の石巻港については、絵図などが残っており、ある程度港湾の状況も知ることができる。

江戸後期には河口は堆積物で浅くなり、海船のうち大きな船は河口に入れないうち、あるいは入っても河口すぐのところまで瀬取船に積み替えざるを得なくなっていた。また、河口のすぐ沖には「一之折」、「二之折」と言われる浅瀬ができ、そこで座礁して破船する場合もあった。

こうした河口港の宿命というべき港の水深の浅さが、次の時代に大きな影を落としていた。

### 3. 明治・大正・昭和戦前期

明治維新以後、近代的な海運が始まると、石巻港はその水深の浅さから、大型の汽船の寄港地にはなりえなかった。

そのため、明治 11 年から野蒜築港が始まり、明治 15 年には落成式を行うところまでだったが、明治 17 年の台風により突堤が崩壊し、野蒜築港は失敗に終わった。

一方では、近くの荻浜港が日本郵船の定期寄港地となり、神戸～横浜～函館間の沿岸貨物輸送の中継基地となっていた。

ただ、明治 13 年に始まり 23 年間に及ぶ北上川第 1 次改修工事（石巻～盛岡間 196km の低水工事・水害防止工事）によって、川沿いの舟運が繁栄した。宮沢賢治なども、北上川の舟運を利用して石巻を訪れ、生まれて初めて海を見ている。

しかし、明治 24 年の東北本線が開通したため、北上川舟運や沿岸航路の貨客が鉄道に奪われ、石巻港は衰退していった。

昭和 7 年から、北上川河口の東突堤と西突堤の築造と臨港部付近の埋立てが開始された。それに、河口部や石巻港内の浚渫が毎年なされるようになった。

そして、同 12 年に東北振興パルプ会社（現日本製紙石巻工場）が誘致された。

また、大正元年に石巻線、昭和 3 年に宮城電気鉄道（後の仙石線）が開通し、港の背後の交通が整備された。



【旧魚市場】



【現魚市場】

### 4. 昭和・平成期

それまでは、北上川の河口が石巻港であったが、船の大型化に対応が困難であったため、河口の東側（長浜地区）に漁港、西側（釜地区）に工業港をつくることとなった。

工業港は、昭和 35 年に、日本における「掘込み式港湾」としては第 1 号として着工され、昭和 39 年 4 月重要港湾の指定、昭和 42 年開港の指定を受け、同年 3 月に第 1 船が入港した。



【工業港の基礎工事の様子】

その後、入港船舶数の増加による港湾施設の狭隘化などから、平成元年、雲雀野地区港の建設を中心とした大水深岸壁の整備と企業立地を目的として港湾計画が改訂され、平成3年第1期計画分162.1haについての公有水面埋立免許を取得するとともに、5万D/W級水深14m岸壁をはじめとするバース及びヤードの建設が進められ、平成10年に4万D/W級水深13m岸壁第1バース、平成17年には第2バース、また平成18年に水深10m岸壁がそれぞれ供用を開始し、3万トンクラスの大型船舶が相次いで入港している。

漁港は昭和38年着工し、昭和48年に特定第3種漁港に指定され、昭和49年漁港施設の概成と魚市場の完成により、8月1日開港した。その後も整備が続けられ、現在にいたっている。

## 第2章「みなと文化」の要素別概要

### 1. 船を用いた交易・交流活動によって運び伝えられ、育ってきた「みなと文化」

#### (1) 芸能

宮城県の「民謡」として有名な「大漁唄い込み」は、遠島甚句（としまじんく）、斎太郎節（さいたらぶし）、どや節を組み合わせて昭和6年に後藤桃水によって作られたものであるが、このうち斎太郎節は、南部民謡「鑄銭坂」を基とした銭吹き唄であるとされ、石巻鑄銭場へ出稼ぎにきた南部領の職人が広めたものとされている。しかし、橋本晶は、むしろ、北上川舟運を通して石巻を訪れた南部の川船の乗組員が広めたと考えらるべきとしている。石巻は、仙台藩だけでなく、南部と八戸両藩の積み出し港でもあった。（八戸藩の飛び地が北上川沿いにあった）。

#### (2) 言語

石巻地域は、北上川舟運によって岩手県（盛岡藩）、海運によって東京（江戸）・北海道（松前・蝦夷）などと直接結ばれている。したがって、人の出入りも多く、言語もこれらの地域からの影響を受けている。ジャガイモ＝ニドイモ（岩手県と共通）、ダンベ（小型の運搬和船）は江戸から入って来たことばとされる。また近代の例であるが、漁具のメガネ（アワビ漁などの際に水中を覗く道具）は北海道で最初に使われ、三陸沿岸づたいに南下し石巻地域でも使われるようになったとされている。

他地域と同様であるが、石巻地域もテレビなどの普及により、地域の独自性が薄れてきている。

#### (3) 文芸

歌枕としての「奥の海」、「袖の渡り」、「真野の萱原」の比定地が石巻にあり、石巻地域は「みやびの極界」として位置づけられていたとされる。

近世になると、俳句が盛んになり、磐井郡の高橋東臯が北上川下流域に影響を及ぼし、石巻地域の俳人もこの影響下にあったとされる。ここにも北上川舟運の影響が見て取れる。

#### (4) 信仰

##### ①船魂神社

北上川河口部に位置する船魂神社は、名前のおり船魂を祀るもので、海上安全の守護神である。船魂とは、造船の際に帆柱の根元などに祀られたもので、したがって、船乗りだけでなく、造船関係者の信仰も篤かった。付近は近世に播磨国明石から来たとされる造船関係者が集住したところである。

##### ②鳥屋神社

旧石巻村の鎮守である鳥屋神社は、延喜式内社であり、「仁徳天皇五十五年に夷御征討の砌、伊勢神宮内宮末社猿田彦大神に御勅願あり、静海心のままに東奥牡鹿の鳥屋岬の津に着船し、官軍数々利有り、因りて此地に創祀されたと伝えられ創祀された」と伝えられている。

石巻港に船が多数出入りするようになって、海上安全の守護神としても信仰されている。

神社には、県指定文化財の「奥州石ノ巻図」が奉納されていて、そこには神社付近から見た石巻港の繁栄の様子が漆蒔絵で活写されている。

### ③鹿島御児神社

旧門脇村の鎮守である鹿島御児神社は延喜式内社であり、「往古、関東の鹿島、香取の両神宮祖神の御子が共に命を受けて海路奥州へ下向し、東夷の征伐と辺土開拓の経営にあたることとなり、その乗船がたまたま石巻の沿岸に到着、停泊して錨を操作した際、石を巻上げたことから、石巻という地名の発祥をみたのだ」との言い伝えがあるという。

近世以後は、海上安全の守護神としても信仰されている。同社の神輿納めの唄は、地元の造船関係者の間で伝承されていた曲で、地元では「明石藩御船唄」とのつながりがあるとされている。

また、神社所在地は日和山で、境内は絶好の日和見の場所となっている。

### ④海門寺

海門寺は、元禄 16 年（1703）仙台大町の万空が開基となり、仙台太年寺第四世鳳山和尚が開山となって聞かれた黄檗宗の寺である。

安永 2 年（1773）に仙台藩主伊達重村が、領内の船乗りの海難よる死者の霊を慰めるために始めた施餓鬼会は、毎年お盆に三日三晩徹夜で行われ、海門寺の恒例行事となり、以来代々の僧侶が、石巻港出入りの船の航海安全を祈願する藩の直願寺として格別の待遇を受けていた。

### ⑤キリスト教

明治以後の石巻は、キリスト教が比較的早く根付いたところである。これは、周辺地域の物資の集散地であり、他地域の人々や文化が交わる場所であったため、異なった文化を受容しやすかったものと考えられている。

ハリストス正教会は明治 13 年（1880）、山城町教会（プロテスタント）は、明治 18 年の創立である。また、石巻栄光教会は、日本におけるアメリカン・クリスチャン教会の最初の伝道地として明治 20 年に創建されている。

## （5）節句・行事

宮城県の正月の雑煮は、一般にはハゼを焼いたもので出汁をとるが、石巻の古い商家では、江戸風に出汁を取り、鶏肉・蒲鉾・菜を入れて食べることがある。

## （6）生活用具

石巻港から米などを積んで江戸に向かった船は、帰りには様々なものを積んで帰って来た。特に多かったのは古着などの衣料関係品・陶磁器などの生活用具である。

比較的寒冷な東北において綿はあまりつくられず、したがってこうした帰り荷の衣料関係の荷は貴重なものであった。

市内に現存する陶磁器店は、千石船の船頭だった初代が復路の空船の安定を保つため陶器を積んで石巻へ帰り、副業として陶器店を始めたという。



## 2. 交易による流通市場の形成によって育ってきた「みなと文化」

### (1) 物資の流通を担う産業

#### ①近世の市場

近世奥州最大の港とされていた石巻港であるが、残念ながら市場は発達しなかった。それは、もっとも重要な物資である米について、仙台藩の政策として江戸での売り払いを原則としていたからである。したがって、石巻は倉庫機能が主であり、活発な取引市場が発達することはなかった。

#### ②流通の担い手

市場が発達していなかったとしても、それなりの回船問屋は数多く存在し、仙台藩の米を運ぶ船は「石巻御穀船」と称されていた。19世紀初めには50隻以上が存在していたことが判明している。これらの船は石巻～江戸間を往復し、物流を担っていたのである。これらの回船問屋の子孫は、その比較的豊かな財力をもとに明治維新後も石巻の商業などの担い手として活躍し、現在も残っている家も多い。

#### ③石巻商社・三陸商社

明治2年ごろ設立された石巻商社は、蚕糸の流通統制及び米の取り扱いを主な事業としていた。石巻商社は、明治3年(1870)の登米県庁で行われた三陸会議で三陸商社となり、北上沿岸諸県の貢米運送や石代金上納、その他産物買上げなどに飛躍的な発展を遂げ、明治前期の流通の担い手として存在していた。

### (2) 交易物資の保管施設

前述のように、石巻港では市場が発達せず倉庫機能が主であったので、近世には多くの米蔵などが建てられていた。幕末期の絵図には、住吉地区に「御蔵」、石巻と門脇の境界付近に「御穀蔵」と「御肴蔵」、湊地区に「御米蔵」及び「御木蔵」が描かれている。別の絵図には湊地区に「塩蔵」も描かれており、これらが藩の公的な倉庫といえる。また、港機能と関係するかどうかは不明であるが、石巻地区に「御備初蔵」も描かれている。

そのほかに登米屋敷も絵図に描かれていて、これは伊達家の一門である登米伊達家の江戸回米を保管した蔵である。「南部会所」、「一関会所」も描かれており、仙台藩以外の物資も石巻で保管されていたことがわかる。

### (3) 行政施設

幕末期の絵図には、石巻港を機能させていた各種の施設が見える。

門脇の河口近くに「御船蔵」及び「津方会所」、中瀬に「御石改所」、湊に「ヲン改所」、袋谷地に「御番所」があった。また、各蔵の側には「会所」があった。

## 3. 航路ネットワークを利用した地場産業の発達によって育ってきた「みなと文化」

### (1) 港湾関連産業（海運や港湾活動を支える産業）

仙台藩の御座船棟梁兼御船横目大工棟梁を世襲した中村家初代の中村庄右衛門定春は、播州明石の出身で、江戸で見いだされ、寛永12年(1635)に造船技術をもたらすため石巻へ来たという。そして、それまでの「四板造四百俵積」の船で那珂湊までしか行けなかったのが、庄右衛門が海船を建造したので、銚子・江戸へ直航できるようになったという。

この初代中村庄右衛門が呼び寄せた上方などからきた大工の末裔は、明治以後造船所を経営し、漁船などの建造に従事しており、今でも造船業は、石巻の重要な産業のひとつとなっている。

## （２）港湾利用産業（原料の搬入・製品の積み出し）

### ①漁業

近世の石巻周辺の沿岸部及び牡鹿半島の各浜では漁業は基幹産業のひとつであった。石巻には「御肴蔵」があり、魚の市場があったと推定でき、石巻に集められた魚介類は、石巻から小廻しの回船で仙台湾岸を運ばれたと考えられる。

現在の石巻港は、水揚量で常に全国 3～5 位となる大漁港となっている。また、水産加工業も発達し、その原材料は石巻港に水揚される魚介類だけでなく海外などからも石巻港へ直接輸入されている。

### ②製塩業

石巻港の西側にある万石浦には近世から昭和中期まで製塩業が営まれていた。近世前期に下総行徳の塩田技術を移入して始められたと伝えられており、仙台藩最大の製塩地であった。近世の流通の実態は不明であるが、石巻港を利用して仙台湾岸及び北上川沿岸部へ出荷されたものと考えられる。

### ③製紙業

昭和 12 年に誘致された東北パルプは、現在では日本製紙石巻工場として石巻最大の事業所となっており、その関連事業所も数多い。そして原材料・製品の移出入は石巻港が使われている。

### ④鑄銭場

近世の石巻を特徴づけるもののひとつに、鑄銭場がある。これは、仙台藩が幕府の許可を得て、寛永通宝などを鑄造したもので、石巻が選ばれたのは、原材料の移入及び製品の移出の便が考慮されたとされている。

## 4. 港を介して蓄積された経済力に基づき、人々の生活の中で育ってきた「みなと文化」

### （１）遊里・料亭文化

近世後期以後には富裕な商人層も出現し、石巻にも料亭や遊里があった。遊里は、近代になると現在の旭町に集められた。現在もその遺構が残る家がある。

そのほかに待合と言われた店があり、徳田秋声の小説「縮図」の舞台のひとつが石巻の花柳界であり、その建物は平成の初頭まで現存していた。この建物は客同士が鉢合わせしにくいように階段が複数あるなど、独特の構造をしていた。

### （２）芸術・芸能

東北大学附属図書館所蔵の「筆まかせ三冊 藤原衆秀撰（文政から天保に至る諸国巡回興行日記）」では、義太夫語りの芸人が、浦賀から船で石巻を訪れ、以後東北地方を巡業していく状況が書かれている。船で直接江戸の芸能者が石巻を訪れたことが確認できる貴重な例である。

### (3) 文芸

近世以降、数多くの文人・知識人が、石巻を訪れ、紀行文などに石巻の港の様子が描かれている。おもなものをあげると、松尾芭蕉、長久保赤水、吉田松陰などがいる。

松尾芭蕉の奥の細道では、「数百の廻船入江につどひ、人家地をあらそひて、竈の煙立つゞけたり。思ひがけず斯る所にも来れる哉と、宿からんとすれど、更宿かす人なし。漸まどしき小家に一夜をあかして、明れば又しらぬ道まよひ行。袖のわたり・尾ぶちの牧・まのゝ萱はらなどよそめにみて、遥なる堤を行。」と描写され、石巻が繁盛の港であることを描写している。なお、石巻において宿を貸す人がなかったのは、事実ではなく曾良日記によれば「新田町の四兵衛」宅へ泊まっている。

宮沢賢治は、中学校の修学旅行で北上川を船で下り、石巻を訪れ、生まれて初めて海を見ている。その感動を、後年詩に残している。石巻港を見下ろす日和山公園にこの詩碑がある。

## 5. 港を中心とする社会的・経済的営みの総体として形成されてきた「みなと文化」

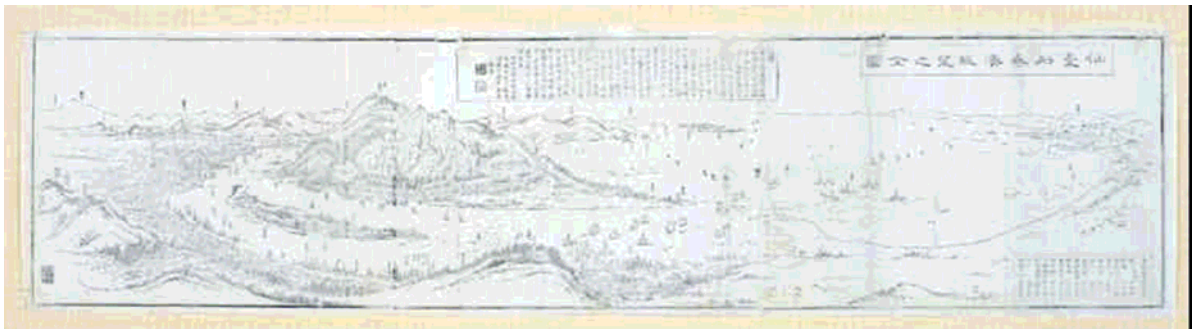
### (1) 港発祥の地

石巻港の発祥の地はよくわからない。しかし、北上川東岸の湊地区には中世の板碑が数多く残されており、また、「牡鹿本郷」との伝承もあり、古くはこちら側が中心地であったことを示唆している。おそらく「牡鹿湊」と称されたのはこの湊地区であろう。

### (2) 港・海運に関する歴史的施設

現在の石巻港には古くからの港湾施設は残されていない。唯一日和山がある。

日和山は、北上川西岸部にあり標高約 55m で、その眺望は大変よく、仙台湾が一望できる。港からも近くまさに日和見をするのには絶好の場所である。



【仙台石巻眺望之全図】(近世末期の石巻を眺望したもの)

### (3) 港町の町並み

#### ①町割

各町場の成立は、一部を除いて不明である。ただし、各町の名称から成立の順番を推定できる。

たとえば、石巻村は、本町を中心にその北側に中町、西側に裏町、中町の北東に横町、裏町の北東かつ横町の南西に新田町といったように、本町を中心に町がだんだんとできあがっていった状況が推定できる。そして、これらの町は、近世前期、大体寛文年間（17世

紀中ごろ) 以前には成立していたと考えられる。

## ②建物

石巻は火災や地震・津波など災害も多く、江戸期の建物は寺院などを除き残っていない。ただ、明治期の相馬氏(旧相馬藩主)関係の屋敷、旧石巻ハリストス正教会教会堂が現存している程度である。ただし、屋敷割については、旭町(蛇田町)、門脇などにその名残が残っている。



【旧石巻ハリストス正教会教会堂】

## (4) 港町の景色(みなとの文化的景観)

石巻港を眺望できる最高の場所は、依然として日和山である。頂上の神社付近からは工業港・河口港・漁港が一望でき、東側の地点からは河口港の内陸寄りの部分が眺望できる。

古い港と新しい工業港・漁港が同時に眺望できる唯一の場所である。

さらに、天候がよく空気が澄んでいれば、石巻だけでなく奥松島や相馬方面まで見ることができる。

そのほかの眺望点は、トヤケ森山・駕籠坊山・上品山などの頂上から石巻を見ることができる。



【安政年間の石巻絵図】(各種の港湾施設が描かれている)

### 第3章 「みなと文化」の振興に関する地域の動き

#### 1. 港湾感謝祭の実施

宮城県北部の産業経済に重要な役割を果たしている石巻港を周知し、さらなる石巻港の発展を目指すことを目的に、毎年10月に港湾感謝祭が、これまで7回開かれている。



【第6回港湾感謝祭の様子】

#### 2. 海洋文化発展を目的とした慶長使節船ミュージアム

宮城県慶長使節船ミュージアム（サン・ファン館）は、慶長遣欧使節等の大航海時代の歴史的事績、並びに船舶及び海洋に関する学習・体験の場を提供することにより、地域の振興及び青少年の健全育成を目的とした博物館で、石巻港からほど近い渡波大森地区にある。

今から約400年前ヨーロッパに渡った仙台藩士支倉常長ら慶長使節を乗せて太平洋を往復した木造帆船「サン・ファン・パウティスタ」の復元船を核に、慶長使節の歴史や大航海時代の帆船文化を映像、ロボット、シミュレーターなどの先端技術を駆使して展示している。



【「サン・ファン・パウティスタ」の復元船】

〔参考文献〕

- 石巻市史編さん委員会、『石巻の歴史』1・2・3・4・6・9巻、石巻市  
佐々木淳、「近世港湾都市の成立と展開」『石巻文化センター調査研究報告』、石巻文化センター  
佐々木淳、「近世東廻り航路の買積船と港湾都市」『幕藩制社会の地域的展開』、雄山閣出版  
『角川地名大辞典4 宮城県』、角川書店  
「石巻の水産」2007年版、石巻市  
石垣宏ほか、『石巻まるごと歴史探訪』、ヨークベニマル

〔参考ウェブサイト〕

- <http://www.santjuan.or.jp/>  
<http://www.port-ishinomaki.jp/japanese/hazime.html>  
<http://www.city-ishinomaki.lg.jp/index.jsp>